

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 23 回

第 5 章 古田足日先生

その 3 社会にひらく「散文」(中の前半)

昨年(2024年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年だった。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳だった。

「戦後80年」

ことし、日本は「戦後80年」を迎えたが、世界では、内戦をふくめ、ずっと何らかのかたちで戦争がつづいている。いまでも、ウクライナやガザが戦場になっている。まるで、戦争に取り囲まれているような状況だ。

ことしの1月から3月にかけて、私の編集で『戦争がわたしたちを見つめている戦争文学セレクション』全3巻を刊行した。版元の汐文社から仕事の依頼があったのは昨年の春だった。担当は、戦後50年近くたって生まれた若い編集者である。戦後10年に生まれた私とふたりで、作品選びからはじめた。最初に相談したシリーズのタイトルは、『戦争文学がわたしをおとなにした』だった。『戦争文学セレクション』には「反戦」や「平和」の願いがこめられているけれども、10代の読者には、戦争が繰り返されてきた歴史と、戦争の中を生きた人がいるということをまず知ってほしいと思った。それが、おとなになるということではないかと考えたのだ。

しかし、このタイトルは、出版社内で少しわかりにくいということになって、『戦争がわたしたちを見つめている』というシリーズ名が提案された。わたしたちを取り囲み、わたしたちを見つめているかのような戦争が突きつけてくる現実を目を向けてほしいという意図だ。より積極的なタイトルになった。

第1巻『少年が見た戦争』の巻頭は、三木卓の小説「夜」。広島に原爆が投下された2日後の8月8日、ソ連軍が日ソ中立条約を破って宣戦布告し、9日の未明に満洲へ侵攻してくる。少年の眼をとおして、その夜を、そして、大きな時代の流れを描いている。つぎに、茨木のり子の詩「わたしが一番きれいだったとき」、看護婦だった母が子どもたちに空襲の体験を語る、杉みき子の児童文学「春さきのひょう」とつづく。

小学校高学年以上の読者に読みやすいように、本文は総ルビで、脚注もつけた。ぜひ読んでほしい小説も詩も、小学校低中学年向けといわれるものでも中学・高校生が読むと新たな気づきがあるはずの作品も入れた。この作家にこんな作品もあったのかというものも、SF的な手法で描かれた作品も収録した。

第1巻では、古田足日の「ブツとなる閣へひり大臣」(椋鳩十編『いたずらわんぱくものがたり』童心社1979年所収)が読める。第2巻は原民喜「夏の花」にはじまる『こわされたまち』、巻末には、宮川ひろ「おはじき」(『びわの実学校』第26号、1967年12月)を置いた。第3巻はいぬいとみこ「川とノリオ」にはじまる『戦火のあとに』、今西祐行「ヒロシマの歌」(『日本クオレ② 愛と真心の物語』小峰書店1960年所収)や、あまんきみこ「すずかけ通り三丁目」(『びわの実学校』第26号、1967年12月)も収めた。第3巻の巻末、シリーズ全体のおしまい、この連載の第8章で書く予定の那須正幹さんの「The End of the World」(『六年目

のクラス会』ポプラ社 1984 年所収) だ。

戦争を直視するのは、決して簡単ではない。それでも、戦争のただ中を懸命に生きた人たちの物語にはげまされて、わたしたちは、ようやく戦争を見つめ返そうとする。『戦争文学セレクション』全 3 巻は、独自の戦争漫画の作者でもある今日マチ子の表紙絵とともに読者に届けられた。

「ブツとなる閣へひり大臣」

『戦争文学セレクション』第 1 巻に収めた古田足日の「ブツとなる閣へひり大臣」は、1993 (平成 5) 年刊行の『全集 古田足日子どもの本』(童心社) では、第 2 巻の第 2 部に「資料作品」として 2 段組みで掲載されている。古田の作品のなかでは、それほど知られた短編ではないかもしれない。

作品には、日本の同盟国ドイツの総統ヒトラーをもじったヘトラーを最上位とする、子どもたちの屁の試合 (ヘリンピック) が描かれている。しかし、1941 (昭和 16) 年にはアジアでの戦争がアメリカ、イギリスとの戦争に拡大して、屁をひくこともできない食糧難にみまわれることになるのだ。

最初に作品が発表された『いたずらわんぱくものがたり』は、作家たちの子ども時代の思い出につながる書き下ろしの短編を集めた『小さな心の記録シリーズ』の 3 冊めだ。1927 (昭和 2) 年生まれの子どもの古田の子ども時代は、15 年戦争とまったく重なるから、自然に戦時下の子どもたちが描き出されることになったのだろう。

作品の後半、子どもたちは、当時の陸軍大臣、東条英機を「へひり大臣」に任命する辞令を書く。「ぼく」は、「もし、ぼくらがだしたちゅうのが見つかったら、ぼくら、けいさつにつれていかれるんじゃないかなるか？」と不安にかられるが、2 歳年上の兄が「ヘーキだ。へでもない。」という (引用は『戦争文学セレクション』による、傍点原文)。「へひり大臣」の辞令をポストに投函するくだりは創作かなとも思うけれども (注)、作品が古田先生の少年期を描いたものであることは、先生の実のおにいさんのエッセイでたしかめることができる。

「ブツとなる閣へひり大臣」が「資料作品」として掲載された『全集』の第 2 巻に、古田東朔先生 (1925~2013 年) の人物エッセイ「足日の子どもころ」がのっている。東朔先生は、日本語学者として著名な方だった。エッセイには、おとうさんの蔵書から『屁』の本を見つけて兄弟で実践しようとしたことや、中学校の朝礼で足日先生が大きなおならを放ったことが書かれていて、これらは、作品と重なってくる。

父は「東朔はいい子ぶっているところがあるが、足日はそうではない」という意味のことをいっていた。それは否定できない。

確かに、足日の方が素直に反抗していた (というのも変だが) 面がある。しかも、不器用にである。(カッコ内原文)

このあと、2 度にわたる朝礼でのおならの事件が語られる。

「ブツとなる閣へひり大臣」には、戦争が深刻化していく時代の子どもたちの何ともいえない閉塞感と、そこから少しでも解放されたいという心が、それでも、ユーモラスに書かれている。古田足日は自分自身の戦中の体験を描く作品を書かな

かったから、これは、貴重な一編である。古田が「戦争」を書いた作品といえば、この連載の第18回で「相当のところまで書きすすめられながら、中断してしまったことによって、60年代の「戦争児童文学」は、その可能性を最大値まで極めないままにおわっているのではないか。」とした実験的な「瑞穂の国ゼロ時間」なのである。

「教科書のなかの太平洋戦争」

雑誌『世界』8月号の「特集 戦後80年 民主主義の興亡」に、黒川麻実さんが「教科書のなかの太平洋戦争 戦争児童文学教材はいま」という文章を寄稿していたから、読んでみた。小学校の国語教科書のことが書かれている。「戦争を知らない教師や学習者に対し、戦争児童文学教材はどのような役割を果たしていくべきなのか論じていく。」という。

黒川さんは、令和の時代に入ってから、現代の子どもが「戦争」に直面することになる物語、朽木祥の「たずねびと」（光村図書5年）や、中澤晶子の「模型のまち」（東京書籍6年）が教材になったことを新しい出来事としてあげている。——「太平洋戦争を題材にした物語作品と子どもたち^(ママ)と出合わせる場として、長年その役割を果たしてきた小学校国語教科書が、今まさに過渡期を迎えている。」一方で、戦時下の日本を舞台にした、今西祐行「一つの花」（光村図書ほか4年）、いぬいとみこ「川とノリオ」（教育出版6年）、あまんきみこ「ちいちゃんのかげおくり」（光村図書3年）といった、40年以上も教科書に掲載されている「定番教材」のタイトルもあげられている。

太平洋戦争を題材にした物語教材が最初に登場したのは、1974（昭和49）年度の教科書の土家由岐雄「かわいそうなぞう」（学校図書2年）など四つだ。だんだんに増えて、1992（平成4）年度版の18作品がピーク、その後は減少していく。

次第に作品数・教材数（一つの作品が複数の教科書で教材化されることがある一宮川注）が減少してきた背景にあるのは、（中略）教科書会社数の減少（現行の2024年度版の小学校国語教科書を刊行しているのは3社一宮川注）に加え、学習指導要領の改訂も影響している。特に平成一四年度版から平成一七年度版においては、平成一四年度に施行された学習指導要領改訂のいわゆる“ゆとり”教育の方針が、授業時間削減・教科書頁数の削減をもたらし、呼応するように戦争児童文学教材の数も減っていったものと考えられる。また当時、多くの戦争児童文学教材を収録していた教科書会社である日本書籍が、平成一四年度版を機に撤退したことも少なからず影響している。加えて、人々と太平洋戦争との距離が遠のき、呼応するように戦争児童文学教材の数が減っていったことも遠因の一つとして考えられる。

「多くの戦争児童文学教材を収録していた教科書会社である日本書籍」の「撤退」ともあるが、以前にも書いたように、古田足日先生は、この日本書籍小学国語教科書編集委員会の中心のひとりだった。私自身も、この編集委員会で15年ほども仕事をしたのだ。

実践の場としての小学校国語教科書

2014 年に古田先生が亡くなったあと、ご遺族によって、『おいしいれのぼうけん』などの原稿や草稿、創作メモなど、いわゆる「なまの資料」約 4100 点が神奈川近代文学館に寄贈された。そして、先生の蔵書（児童書や、創作や評論の参考文献など）約 3 万 5000 点は、東京都小平市の白梅学園大学・短期大学に寄贈されたのだ。

白梅学園大学は、科学研究費補助金も獲得して、寄贈された蔵書の整理や、それをもとにした古田足日研究に取り組んでいる。大学の外部から、佐藤宗子さんや西山利佳さん、私なども、その古田足日研究プロジェクトにくわわっている。研究成果については、大学図書館報『花みずき』に紹介されたり、大学の子ども学研究所編集の『子ども学』（萌文書林刊行）に発表されたりしている。

鬼頭七美さんの論文「古田足日と国語教科書—『モグラ原っぱのなかまたち』を中心に—」は、『子ども学』第 10 号（2022 年 5 月）に掲載された。「はじめに」に「古田足日は、国語教科書の編集委員を長く務め、自身の作品も掲載され続けるなど、国語教科書に深く関わり続けた。」「古田足日の国語教科書への関わりや、国語教育観、国語教科書観とはどのようなものだったのだろうか。」とあり、充実した論考である。

古田先生にとって、小学校国語教科書は、児童文学批評と創作の大きな実践の場だった。鬼頭論文を参考にしながら、日本書籍の編集委員会で見聞きし、考えたことも織り込みながら、このことを書いていこう。最後には、日本書籍の「撤退」についても、ふれざるをえないかもしれない。（つづく）

（注）

現代児童文学研究会編のアンソロジー『きょうはこの本読みたいな』全 16 巻（偕成社 1990～92 年）の最終巻『うそをついた日に読む本』に「ブツとなる閣へひり大臣」が収録されている。私も編集委員のひとりだったが、このときの編集委員会は、これをホラ話として読んだのかもしれない。それがよかったかどうかと考えている。

（付記） 宮川健郎「10 代の読者たちに知ってほしい」（『この本 読んで！』第 95 号、2025 年 6 月）と内容が重複する部分があることをおことわりします。